

## 紀要第13号の発刊にあたって

四條畷学園大学 木村友厚

学部創設以来発刊されてきた「四條畷学園大学リハビリテーション学部紀要」ですが、しばらく発刊が途絶えていました。今回、紀要第13号を発刊するに至ったのは学術誌編集委員会のご苦勞の賜物であり、大変にありがたく思います。この紀要の内容は、引き続き学術機関リポジトリで公開されることとなりますが、少しでも多くの方々の目に触れ、そしてご意見や批評・批判が頂けることになればと願っています。

さて、大学や学部が発行する紀要に、これからも存在意義はあるのでしょうか？というまでもなく、大学に求められている主要な使命は、教育、研究そして社会貢献であり、これらに関する成果は、検証され、そして公表されることが必要です。研究活動においては、各人あるいは各人の属するグループの研究成果について、国内外の学術誌に投稿し、査読 peer review を受け、そして発表することが求められます。本学でも活動的に活躍されている方々は、まず国外の学術誌に投稿されることも多いと思います。

一方、一般論として紀要の学術的水準は高いとは言えず（もちろん米国科学アカデミー紀要 PNAS など、特別なものも多くありますが）、紀要掲載にあたっての査読もないか簡易的で、学術的な価値の乏しい紀要が多いのではと思われます。したがって、ほとんどの紀要はめったに読まれることもありません。

そのようななかで、学部の紀要の存続意義をあえて考えると、

- ・例えば、実学的性格の強い研究、人文社会系などにまたがる研究の発表において、自由度の高い論文発表の場を確保できる。
- ・若手の研究者の研究発表の場を確保できる。また、定期的に論文執筆を行う修練ともなる。
- ・各人の教育・研究活動などの成果を、埋もれさせることなく定期的に公表することができる。
- ・教員の任用などの際の根拠資料となる。

などがあると思われます。

また紀要の1つの役割として、本学のリハビリテーション学部で、どのような研究者がどのような学術研究を行っているのか、を知ってもらうことができ、また学部として発信したい教育・研究や社会貢献活動を掲載することもできるかも知れません。

本紀要を、今後どのような紀要にしていくのか、学術誌編集委員会で続けて議論して頂き、さらに発展させて頂けることを願っています。